

舊平價か新平價か

——井上、武藤氏の説等を中心として——

越 崎 宗 一

今日、我々の口にする經濟問題の内、十中の八九迄は不景氣問題であると思ふが、我國の不景氣は(一)世界的不景氣に因るものと(二)我國舊平價解禁に因るものとが相重かまなつてゐることは誰しも認むる所である。而も(一)が重いか(二)が重いかに至つては見方によつて相違もあり結局水掛論に陥り易い。然しこれ丈けの事は云へやうと思ふ。即ち今日の不景氣は或は現在の經濟組織の缺陷其ものに基くものもあらうし、又は世界大戦争の後を享けた爲もあらうが特に近くは物價問題、通貨問題、外國爲替に重大なる關連を有してゐることは何人も認め得る點である。

私は井上準之助氏の舊平價説と最近擡頭せる新平價説(金輸出再禁止説)とに就いて其兩者の經

濟觀を見つめてみたいと思ふ。

先づ今日の我國不況は本年一月十一日金輸出解禁以來特に著しいとは一般に稱えられて居る所であるが、井上氏が昨年九月解禁に先立つて發表された意見は

『余は此の説(註、新平價解禁論)に付て卑見を述べんに、先づ第一に現今の如き貨幣經濟時代に於て、貨幣の平價を改定すると云ふことは、一種の經濟革命であつて、國家の信用、國民經濟及、國民精神の全般に及ぼす影響實に多大なるものがある、斯の如き非常措置は他に方法なき絶對の必要あるにあらざれば、之を採用す可らざることは當然である。新平價論者は我國の爲替相場が自然に平價に回復する見込なしと云ふ前提から出發して居るのであるが、余は全然其見解を異にし、政府及國民の決心次第で平價恢復は決して難事でないと思ふ。』

『現在我國の經濟上社會上に於ける百弊の基は、我國が大戦中好況時代の惰性として、奢侈放縱の風尙去らず、公私經濟の收支其の均衡を得ざる點にある。而して大戦約十年にして、尙此の餘風去らざるは、金輸出禁止を繼續し、之に依て虚偽の財政、虚偽の事業經營、虚偽の私生活に對し一種の保護を與へて居つたことが、其の主因の一であると思はねばならぬ。(以上昭和四年九月號改造所載)』

であつた。即ち井上氏の論は先第一に、今日の不況は好況時代の不當膨脹財界に基く爲に第二に、解禁によつて爲替相場を引上げ金本位の常道に戻し第三に、デフレーションによつて財界整理を促すものである。これは現資本主義制經濟組織を是認する限りは理論上誤つては居ない。井上氏は現資本主義制度に對しては透徹せる認識を有す。之を失業意見に見んか

『近代の經濟組織では、世の中の景氣不景氣といふものは免かれることはどうしても出来ない。農業國の昔の日本なら違ひますが、今日のインダストリアリゼーション、今日の經濟組織では、景氣不景氣はある。その景氣の時に、労働者と仕事が一致してゐるならば、不景氣の時には、どんなことをしたつて失業といふものは來ます。人間が經濟組織の重要部分を占めて居る以上は、神經的に、景氣の好くなる時は何時でもいゝ計畫いゝ計畫と、極端に盛になり過ぎる計畫を立てる。景氣が悪くなる時は、亦神經的にそれ以上に不景氣に考へる。實際の問題よりか何時でも景氣不景氣共に餘計に趨りたがる。だから、どんなことをしたつて、今日の經濟組織を考へるときは、人間の力で失業者を防ぐことは出來やしません。當然不景氣は來る、失業者は出來るのです。それはもう私は當然だろうと思ふ。(本年七月改造所載失業問題討論會の内より、又同様の意見は、同氏著「世界不景氣と我國民の覺悟四三——四四頁にあり)』

これは一國の爲政治家の言としては甚だ無責任の言葉の様に思はるゝが、今日の資本主義制度の下にあつては正直の所失業の發生を根本的に防ぐことは出來ないのである。(勿論失業は緩和し得る。これは爲政治家として當然なすべきことである。)私は井上氏はセオリストとしては誠に徹底した理論を有してゐると思ふ。

乍然井上氏の政策(特に舊平價解禁を指す)に對しては相當手酷しい異義が出てゐる。武藤山治氏の近著『井上藏相の錯覺』を繙いて見よう。

『井上藏相は其著書(世界不景氣と我國民の覺悟)に於て、第一に世界の不景氣と其原因について縷々述べられたが、今日何人と雖、世界各國が不景氣に襲はれて居らぬと云ふ様な議論をする者はない。

吾々の主張するところは、我國現下の深刻なる不景氣を専ら世界の不景氣の影響を以て説明することは出来ない。換言すれば、我國現下の不景氣は、世界不景氣の影響よりも、民政黨内閣の誤つた經濟政策に主として原因すると云ふのである。

井上藏相は世界不景氣が日本の經濟界に悪影響を及ぼせる一例として、原産地に於ける棉花の下落が凡そ三割に達して居る事實によつて、紡績會社の經營が困難になることは已むを得ぬ、尙外に一つ附け加へねばならぬ原因がある。それは銀の暴落であると言つて居るが、吾々を以て見れば、斯くの如き外來の變化の甚しい時に、井上藏相の輕卒不用意なる舊平價金解禁を斷行せることが、我產業の經營を困難ならしめたのであつて、之は恰も嵐の時に、態と家の戸を開け放し、それがため家中をづぶぬれにしたのと等しい。雨は嵐が持つて來たとするも、家中をづぶぬれにした其實は、戸を開け放した者にある。然るに井上藏相の錯覺は、此簡単な見易き道理さへも之を認めしめないのである。(一頁——三頁)

『吾々を以て見れば、井上藏相は、吾生絲業を破壊せんとするの目的を以て舊平價金解禁を行つたのではないかと思はしむる程、舊平價解禁によつて我斯業を殆んど破滅に陥れた事は、議論よりも事實が雄辯に物語つて居る。(三頁)』

『……井上藏相はアメリカの不景氣のため、生絲の需要が減退し、其値段も暴落したのだと辯明して居らるゝが、若しそれ程アメリカの不景氣が甚しいなら、愈よ以て現内閣の舊平價金解禁は輕卒不謹慎だつたと云はなければならぬ。……絲價安定融資補償法を實行するに至つたことは、實に口に之を云はざるも、事實の上に於て、自己の不注意に對し、多大の謝罪金を生絲業者に拂つたものに外ならぬからである。(五頁——六頁)』

産業資本家出身の武藤山治氏が産業家本位の立場に立つて金融家出身の井上藏相に論戰せらるゝのは當然と見るべく、其議論も通曉せらるゝ實際産業事情から出てゐることは誠に強味を有する點である。其故に藏相の理論と政策とに對しては可成り突込んだ批評が下されてゐる。

『こゝに暫く總てを藏相に譲りて、我不景氣は世界の不景氣の影響に過ぎずとするも、然るが故に我政府當局は袖手傍觀、我經濟界の慘憺たる現狀を、其赴くが儘に委して好いとの結論は出て來ない。それは前にも述べた如く嵐が來ても家の戸を閉づるを知らず、或は豫期せざる敵の侵入に拘らず、依然として前に定めた戰略を遂行して顧みざる愚に等しい。(一一頁——一二頁)』

『故に井上藏相が、金解禁を急いだ理由を、藏相の心理にまで立入つて批評する人々は、井上氏が金解禁をして、財界を斯んな事にしてしまつたのは、餘りに功名にはやり過ぎたからだ、歴代内閣の大藏大臣が何れも遣り損つた金解禁を自分の手で成功せしめて我國財政史上に不朽の名を残さうと云ふ、一の野心に支配せられた過であつたと云ふのである。我々は敢て他人の心理にまで立入つて兎や角云ふものではない。然し世間に既に斯様の批評がある。而して事實に於て井上藏相は、斯う批評せられても、恐らく辯解の辭はあるまいと思ふ。(五八頁——五九頁)』

『舊平價解禁後の經濟界が非常なる慘狀に陥れるに對し、井上藏相は最早や此邊が不景氣の底であつて、近く好轉するやうなことを云つてゐるが、我々の見る所では、此不景氣は仲々さう手輕には治らぬ。今後國民の貸借關係が次第に整理せらるゝに従ひ、容易ならぬ苦痛を經濟界に於ける幾多の人々に與へ、慘狀が永く繼續する事は極めて明かである。(八〇頁——八一頁)』

此の如く武藤氏は井上氏の説を攻撃して居らるゝが其の不景氣救治實策は左に盡きてゐる様である。曰く

『我々は我國に發生した不景氣の根本原因たる誤つた舊平價金解禁に對しメスを振ふことが唯一無二の救治策なりと主張する。勿論我々は從來の如き漫然たる金輸出禁止を主張する者ではない。我々は井上藏相が無理に四十九弗八分の七の舊平價に引上げた爲替の率を、再び自然の「圓」の國際的眞價値にまで引下げること主張するのである。(八三頁)』

之を以て見れば武藤氏の説は金輸出再禁止にあるのであつて、これによつて或期間爲替相場の率を

引下げてそこに固着せしめやうと云ふのである。氏は必らずしも平價切下げをば主張しないのであつて、世界不況の或期間を經過し、適當の機會が來た時にはそこで舊平價金解禁に導くか、或程度の平價切下げを行ふか、又は永久に金爲替本位制を確立するかは其時の内外の事情によつて徐ろに決定すべきであるといふのである。

武藤氏の論には明白には云つてゐないが、井上氏の理論は前述せる通り現資本主義制度に對する徹底觀よりして理論と其政策の間に若干の間隙あることは否まれない。井上氏曰く

『金解禁により貨幣價值が對外的に上り、これに相當して國內の物價が下落して居るのでありますから、今日は其間に無理もなければ不釣合もないのであります。尙右の關係を生産費方面より見ますると、物價の下落は即ち生産費の低減であります。輸出品が七分だけは不利になる、併ながらそれ丈け或はそれ以上生産費が安くなりますれば輸出の不利は償ひ得て餘りあるのみならず、之が即ち經濟の行くべき正道と考へるのであります。(世界不景氣と我國民の覺悟二六頁)』

右に對する東洋經濟新報社石橋湛山氏の批評を附け加へておこう。

『金解禁に依る貨幣の對外價值騰貴と國內物價下落と一致してゐるから、今日は其間に無理もなければ不釣合もない、又物價の下落は生産費の低下だから、爲替の騰貴で輸出品が安くなつても、こゝにも亦何等の不便不利はない。之は井上藏相の餘程得意の説と見れば、新聞で讀むと、日比谷公會堂の演説でも同様の事を述べてをらる。が我財界の現況を見て、藏相は一體何うして斯んな呑氣な言を、公然口にし得るのであるう。』

第一に藏相は、金解禁に因る我貨幣の對外價值騰貴は、既に之に相當する國內物價の下落、又生産費の低下を伴つてをると説く

が、若し然うなら今日我諸産業は、利益の激減や損失の増加に苦しむ譯は決してなく、従つて財界は不景氣に呻吟する必要は少しもない。或は藏相は、我物價は既に昨年六月來二〇%下つてをる。故に金觸禁に依る我貨幣の對外價值騰貴は、之で十分償つてをると云ふのか知れぬ。が若しさうなら藏相は、此間世界の物價が又一五%下り、即ち「金」の購買力がそれだけ騰貴してゐる事實を、故意か、不注意か、忘れてゐるのである。(同誌本年九月特輯號二〇頁)

然し政策家は必らずしも眞理を其まゝ説き得ない場合があらうと思ふ。すべての政策家がそうである様に井上氏も正直に自分の本心を吐露し得ない場合のあるべきことをも思合はして見なければならぬ。これは何れ後^{のち}に述べよう。然し井上氏と以上の論者との間には其觀點に於て尙根本的の相違を發見する。井上氏曰く

『然し平價切下論者の多數は解禁に依る財界の影響を避くることを眼目として居る。即ち事業界の不振に陥るのを忌むのである。又物價の低下を極力避けようとして居る。寧ろ是等の結果を避くるが爲に、平價切下と云ふ現状維持主義を撰ばんとするのであるから、此點に於て我々と非常に考方の異なる點があるのは事實である。』

『然るに今平價切下に依り一時を糊塗するときは、從來の虚偽を其儘永續すべしと云ふことになり、財政の縮緊も出來ぬ、財界の整理も中斷し、信用の膨脹、物價の騰貴を來し、國民をして我經濟界の難境を自覺せしむる能はず、消費の節約も出來ぬ、經濟更生への努力を消滅せしむるものであつて、解禁問題解決の一半の目的を没却する結果となるのである。(前掲改造所載)』

これは昨年の九月發表の井上氏の説であるが、其後同氏の前掲著書(本年八月)の新平價論併びに

去る十月十日臨時地方長官會議に於ける同氏の訓示は依然として同一意見を固持して居られる。即ちそれは今直ぐ經濟界の不況を好景氣にすべし其外には差當つて策なしと見るものと、現在の不況は忍ぶべし假令其爲に恐慌來るも致方なし（井上氏は口にはそんな事は一度も云つた事がない、乍然前に一寸述べた通り政策家は必らずしも眞理を其儘述べ得ない立場にあるといふ事だけは思出し（て欲しい）然し此經過なくしては現資本主義制の下にある限り我國民經濟の好轉あり得ずと見るものとの、見方の相違があるのである。恐慌來るべきか、又恐慌は怖るべきか。井上氏にこんな事を聞くのは無理である。然し一九二八年六月、佛國政府は爲替の安定と通貨縮少とを實行するため僅に數週間に爲替相場を二四〇法から一二四・二一法まで釣上げて新平價金解禁を斷行した。其爲に佛國商工界は一時的恐慌を起し、國內諸工場中閉鎖したるものが少くなかつたのである。此時まで大凡三百萬人の外國労働者を移入してゐた佛國は、金解禁の結果生ぜし産業界不況のために之等外國労働者の多數を解雇し海外へ送還するの途を講ずると同時に、斯る不況時期の長く繼續することを憂ひ外國労働者の入國に大制限を加へた。然るに不況は豫想の如く長續させずして佛國産業界は其生産力の全てを擧げて尙足らざる程の好景氣を示した。此場合に佛國は新平價を採用したるが故に好景氣を呈したと主張する人もある、（例へば英國アーサー、キットソン）然し此他に平價切下

げを行つた獨逸、伊太利、白耳義等は今日好景氣かと云へば必らずしも然りとは云へない。其故に之の丈けは云ひ得よう。恐慌は出来る丈け避けるべきである。然しどうしても一度は來るべきであるならば餘りに回避策を講ずることは（餘りに恐慌の來ることを延ばすことは）現資本主義制の下に於ては國民經濟に却つて良くないといふ事之である。

私は井上氏の舊平價解禁維持は理論としては誤つてゐないと思ふが、年末金融期を控へて政府が採用し又は採用せんとする氣配にある

一、單名手形救濟

二、社債借替周旋

三、一時的事業資金融通

四、睡眠銀行助長策

五、不良會社救濟

六、買入減資援助

七、日銀見返擔保品擴張

八、日銀利下

舊平價か新平價か

九、保證準備擴張

十、外資輸入獎勵

は寧ろ恐慌回避策と見るべく、これは井上氏の理論と政策に於ける矛盾と思はれる。之等は恐慌の來るのを一時遅らすのみで結果は却つて悪からうと思はれる。

金輸出再禁止、新平價解禁論に對しては理論上は兎も角技術的に不可能を説く人もあるが、本年十月時事新報所載勝田貞次氏再禁止論の排撃(技術上何等困難でない事は九月號公民講座所載高木仙次郎教授「金解禁の遣り直し」に説かれた所によつて明白である。然し理論上最も熱心に新平價を論じて居られるのは高橋龜吉氏(無論此外にも多いが)であるから同氏の理論を聞く事としよう。先づ現經濟狀態の批判として

『金輸出再禁止——新平價出直論は三段の論據から成立つてゐる。

第一段の論據は舊平價解禁に由る通貨價值激變(それは世界的不景氣で更に激成された)に對し我が經濟の過半は未だ之に順應し得ざる矛盾に左の如く苦しんでゐるといふことだ。

一、賣價安、生産費高の不均衡(工業及農業ともに)

二、債務過大、辨濟力疲弊の激化

三、預金減、貸出増大（又は回収不能）の矛盾の激化——金融的破綻の激成

四、貿易入超克服難——金解禁維持難

五、國民の收入減と生活費不減

六、而して右の綜合的現象は金輸出再禁をやれば爲替は暴落すると一般に——反對論者も——信じてゐることだ（若し舊平價解禁に財界が順應して了つてゐれば假令金輸出再禁止をするも爲替は下落するものでない）

第二段の論據はかうだ、

内外の形勢今日の如き現状に於て舊平價解禁を維持せんとすれば、肝腎の財界整理、國民經濟の建て直し等の財界甦生策が實行不能なるのみならず、當面社會を脅かしてゐる失業、農民中小商工業者の破滅的窮乏も經濟的危機も入超連續に由る金解禁の破綻も之を救済し凌駕することが出來ず、たゞ徒らに當面頭上に覆ひかゝつて來る各種の社會的、經濟的、財政的、金融的「破綻」を瀰縫することにのみ専念し刻々と我が經濟を肺患的に衰弱致死せしめるのみだ。……

第三段

然るに新平價出直しに由れば其内具せる財界整理の機能に由つて以上の如き當面頭上を脅かしてゐる各種の破綻を凌駕し得るのみならず、進んで經濟界の衰弱を少からぬ程度にまで回復せしめこの健康回復を脚場にして諸般の根本的對策を實現さす餘地を作ることになる……（十月一日時事新報所載再禁止提唱の論據）

最後に結論に移る。

我現在の經濟が可成り不況に陥つてゐることは何れの論者も認むる所である。然し我戰時好況の

惰性が奢侈放縱に流れた結果であるから不況を深刻にして（換言すれば物價を下落せしめて）緊縮整理することが現資本主義制經濟の下に於て將來我國國民經濟を發展せしむる方策であるといふ見方が一つ。他は現在の經濟界の衰弱を一度引戻して而して對策を立てんとするものである。私は單なる景氣引戻し策では徒に又我事業を放漫へ誘導するのみで決して整理——不況の打開にはならぬと思ふ。單に緊縮のみが整理であるとは思はないが世界不況（又は世界恐慌とさへ名付けられてゐるが）の今日中間景氣を作ることとは決して我國國民經濟の採るべき策でない。但し、恐慌回避策として若しもインフレーション政策などが行はれ物價不落整理不徹底などを結果するに至らば新平價制採用以外には方法の無いといふことを。

——一九三〇・一一・二一——

——札幌苗穂の寓居にて——